



発掘調査の概要

日高山瓦窯^{がよう}の調査（飛鳥藤原第213次）

都城発掘調査部飛鳥・藤原地区では、5月中旬から7月下旬にかけて、藤原宮に供給した瓦を焼いた日高山瓦窯の調査をおこないました。この瓦窯は、藤原宮南面中門のすぐ南にある日高山丘陵の斜面に営まれたもので、これまでの調査で、藤原宮の造営の中でも比較的初期に創業したこと、また、藤原宮の四周をめぐる大垣（掘立柱塀）を中心に瓦を供給したことなどがあきらかになっています。

前号（No.90）では、6月末までの調査であきらかになった丘陵の西北部から北部にかけて築かれた計6基の窯（1～6号窯）の存在とその詳細な構造^{あながま}について報告しました。日本に古くからある窖窯^{あながま}と日高山瓦窯で初めて導入された平窯^{ひらがま}という構造が異なる窯が共存したことや、窖窯と平窯の構造を折衷した窯も検出したことを紹介しました。そして、宮の造営にともなう瓦の大量生産という、かつてない大事業に直面した瓦工人の試行錯誤が、画一性のない窯の構造に表れているのではないかと推測するにいたりました。

その後、7月上旬からは、瓦窯の範囲と未知の窯

の所在を確認するため、丘陵の東北部に幅約2m、長さ約30mの調査区を設定しました。その結果、新たに灰原（7号窯）および2基の窯（8・9号窯）を検出し、窯の作業時には、丘陵の北半を瓦窯がぐりと取り巻いていたことが判明しました。ここでは、窯の構造が一定程度判明した8・9号窯について報告します。

もっとも東で検出した9号窯は、丘陵の岩盤を広く掘り込み、その内部を幾層もの積み土で固めたのち、中央部分に窯の本体にあたる窯壁を築いています。このつくり方は、窖窯である1号窯や、窖窯の可能性が高い6号窯と共通します。なお、積み土は、棒状の工具で盛土を薄くつき固める作業を何度も繰り返す版築^{はんちく}工法で築かれています。今回の調査では、径5cmほどの工具の明瞭な痕跡も確認しました。

8号窯も、丘陵の岩盤を広く掘り込み、その内部を版築状の積み土で固めている点が1・6・9号窯と共通します。しかし、積み土の内側に窯体を構築した痕跡や、熱を受けた痕跡はありませんでした。このことから、窯をつくりかけたものの、何らかの理由で放棄されたものとみられます。こうした窯の存在からも、日高山瓦窯の作業が一筋縄ではいかなかったことがうかがえます。

拡張区では以上のような成果を得ましたが、調査期間が限られていたことから、一般の方に広く現場を公開し、報告することが叶いませんでした。そこで、1～9号窯についての発掘調査成果を記した看板を丘陵北側の出入りに設置するとともに、学術情報リポジトリ上において公開しました。ぜひご活用ください。

（都城発掘調査部 岩永 玲）



9号窯全景（北西から）



8号窯全景（北東から）